



震災直後から炊き出しを続けてくれた陸上自衛隊の皆さん

停電・断水・道路断絶 食糧不足は危機的状況

震災発生直後の町内は、停電と断水に加え、通信の断絶やがれきりや崩壊による道路交通網のまひなど、危機的な状況にありました。このような中、真っ先に動いたのが、町内内陸部の津波の被害を直接受けなかった地区の住民の皆さんでした。炊き出しなどの食事やがれきり撤去な

ど町民を支えてくれる活動がたくさんありました。

町内のスーパー、商店は津波の被害に遭い、食料を確保できず、さらに停電や断水が追い打ちを掛けました。災害対策本部は直ちに豊間根・荒川地区へ炊き出しの要請を行いました。「作れるだけたくさんお願いしたい」――。

このほかにも、関谷・関口地区や轟木・田子の木地区、船越地区など、多くの町民が避難し

避難者自身も参加して 住民総出での炊き出し

ていた皆さんのために炊き出しを開始しました。

豊間根地区の避難所へは、役場周辺施設へいったん避難した後、迫りくる火災から逃れた山田地区の住民が数多く避難しま

した。その避難所で始まった炊き出し。地区の自治会を中心に、米や梅干し、のり、ラップなどを各家庭から持ち寄り、保管していた精米されていない米を発電機を使って精米し、ご飯を炊きました。深夜まで続く作業。初めの1日でその数は1926個にもなりました。

その日から休みなくおにぎり

最初の一步を踏み出す力に

停電、断水、食料不足…。町民の生活が大混乱に陥る中、活動を続ける人たちの善意がわたしたちの支えとなっています。



優しい言葉が励みに（自衛隊医療班による問診）



秋田県湯沢市による応援給水

を作り、数がある程度固定されたときはシフトを組み交代で休みをとりながら続けました。

連日の炊き出しで問題となったのが、炊き出しを行っていた人はほとんどが農家で、田植えの準備の時期が迫ってきたこと。いつまで炊き出しが続くかわからない状況で、米が作れなければ支援することもできなくなるを考え、避難所へ炊き出しの協力をお願いしました。協力をしてくれた人の中には、中高生や親子連れもいました。「震災直後は表情が暗かったが、みんなおにぎりを作っていると次第に表情が明るくなった。一緒におにぎりを作れて良かった」と地域の皆さんは言います。

この炊き出しは町民の命をつなぎ、町民の心をも明るく前向きな気持ちへと変化させてくれました。

厳しい被災地の生活を支えた自衛隊員の活動

航空自衛隊は、地震後すぐに対策本部に駆け付け、食料、水、毛布を避難所などへ輸送。その後陸上自衛隊と合流し、行方不明者の捜索やがれき撤去、医療班の派遣、給水、風呂の設置などさまざまな支援をしていただきました。7月まで続いた自衛

隊による支援は、給食支援11万食、入浴支援の利用者は4万4千人、救援物資は大型トラック650両にもなります。

7月12日には、役場前で陸上自衛隊に対する感謝の会が行われました。沼崎喜一町長からの感謝の言葉の後、陸上自衛隊第九特科連隊長の小林栄樹一等陸佐が町民に向け「派遣活動を通じて、町に親しみが湧き、古里に対する愛着のような気持ちを抱くようになりました。美しき町に復興・発展するよう祈っています。がんばれ山田町」と力強い言葉を残してくれました。

また、7月19日の航空自衛隊に対する感謝の会にも多くの町民が集まり、隊員の皆さんに感謝を込め盛大な拍手を送りました。航空自衛隊北部航空方面隊の須田浩一等空佐は「活動期間中、皆さまから勇氣と誇りをいただきました。活動は一区切りとなりますが、山田に分屯基地がある航空自衛隊は、今後も変わらぬ身近な存在でありたいと思っています」と述べました。

生活基盤の復旧のため続けられた懸命の支援

震災は、それまで当たり前にあった道路や水道などのライフライン、生活になくはならな